が、もとよりこんなことには決して適當した土地ではないと〻もに、上述の様な氣候だから之によりて生活するなどとは思ひもよらない、だから自然に此民族は遊牧を以て本業として居る、しかし遊牧なることは、名の如く一所にとゞまることをゆるさない、そこで彼等は所謂、轉居をやるのである、住所の定在といふことがないのである、そして轉居しても必ずしも良好の牧場が至る處にあるといふのではない、水の便牧草の豐富と云ふ樣な便利の地は實際鮮かつた樣であるとして見ると彼等の生活なるものは誠に天與の恩惠を缺いて居ること夥だしいものであつて、その生活なることがすでになか〳〵困難であつたと思はねばならぬ、未開蒙昧の民族が日々の生活に頗ぶる困難を感じながら曠漠たる沙漠不毛の山野の間に徘徊し、變轉極めて多き自然現象の下に起臥して居つたのであることは、先づ冒頭に承知して置かねばならぬのである、かくして始めて本題の攻究に从ることが出來る。

ラフイットが曾て支那文明を論じたものを見るにコムトのボジチピズムに基づいて社會文明の發達を三別して物象崇拜時代、有神時代、實驗哲學時代として漸次順を逐ふて發達するものだと論じて居る、實際物象崇拜時代なるものは社會進化の間に必ず經過すべき第一の階段である、人知未だ開けずして萬象の存在に對するときには、必ずこゝに一種の疑惑を生じて之を解かふとする、然もその智識の程度低いがためにどうしてもわからない、そこでこれらの物象を自己人類と同視し之に生命を與へて一箇の活動として見る樣になるのは蓋し彼等の間に於る一種の哲學であつて如何なる民族でも歴然として此跡のあつたことを認むることが出來る、蒙古族當時の有樣はまさにこれであつて文明發達の階段にあてはめて見れば、その極めて幼稚なる時代に屬するのである、彼等の先づ注意を惹くべきものは天であろう、由來天を尊び之を祀るといふことは昔時北方民族の間に通じて行はれたばかりではなく、